中部東海ブロック

ブロック活動報告

三重県におけるサウンドテーブルテニス審判員の活動

「わたSHIGA輝く障スポ2025」にも参加

REPORTER 中河聖智（中級指導員／三重県パラスポーツ指導者協議会）

16年前、私は介護福祉士養成校に在籍していたときに初級パラスポーツ指導員の資格を取得、それを機に活動を始めました。そして現在、自分の軸となっているのがサウンドテーブルテニス（STT）の公認審判員としての活動です。資格を取得して間もない頃、選手・審判員も数名で活動をしていましたが、お互い協力しながら地道に続けた結果、少しずつ人数も増えて今では20～30名の選手と15～20名の審判員で活動ができるようになりました。

三重県での主な活動としては2か月に1度「STT審判講習会」を行なっています。毎回、選手の方々を招いての実践形式を通して、各審判員がお互いに感じたことや疑問を出し合い、判定基準・ルールの解釈の統一を図っていくことを目的としています。また、実践以外でもリーグ戦・トーナメント表の組み方やルールについての講義も取り入れ、審判員として必要なスキルを学び、共有できる場として実施しています。

「わたSHIGA輝く障スポ2025」のSTT競技

競技の様子

また、近年では中部東海地区や近畿地区、そして毎年、視覚障害者卓球連盟主催で行われる全国大会など県内・外で行われる大きな大会に多数の審判員が参加するようになりました。そしてこの度、10月25～27日に開催されました第24回全国障害者スポーツ大会「わたSHIGA輝く障スポ2025」のSTT競技に、三重県から私を含む8名の審判員が競技役員として参加しました。普段の大会とは違う特別な雰囲気の中での試合進行は、とても緊張しましたが、貴重な経験をさせていただき、今後の自分の糧になっていくものと感じました。最後に審判員としての活動を通して、様々な方々と出会い、そして大会などでいろいろな場所へ行く機会が増えたことで、今ではSTTがライフスタイルの中で、楽しみのひとつとなっています。競技の特性上、難しい所もありますが、多くの方に競技を知ってもらい、普及していけるよう活動を続けていきたいと思います。

中四国ブロック

ブロック活動報告

帯同で感じたコミュニケーションの大切さ

「わたSHIGA輝く障スポ2025」に帯同して……

REPORTER 玉乃井典子（中級指導員／愛媛県パラスポーツ指導協議会）

令和3年に愛媛県でもボッチャ協会が設立されました。そのころ初級指導員を取得した私は、愛媛県身体障がい者福祉センター体育館で原田選手と一緒に練習するようになり、その後大会で知り合った3人の若い選手たちを自主練習に誘って、2年前より障スポ大会を目指して練習するようになりました。

中級指導員講習で知り合った鳥取県米子の上野さんがボッチャ競技をしていたことから、練習方法を相談してアドバイスをもらうようになりました。その選手にあった投球方法を模索しながら一緒に練習を重ねて、原田選手は障スポとちぎ大会でボッチャ競技に出場することができました。

その後もみんなで障スポ大会を目指して練習してきました。予選会で良い結果が出せませんでしたが、「今年こそ優勝して、滋賀に行きたいね」とみんなで予選会に臨みました。1戦1戦昨年よりも練習の分だけ、確実にジャックボールに寄せる実力が身についている姿を見ることができました。立位の松田竜聖選手とは、「どうしたい？どうすればいいと思う？」などと声をかけながら一緒に考えて練習を重ね、見事に立位で優勝することができました。障スポ滋賀大会では、座位代表の光永倖明選手とのペアで3位の銅メダルを獲得しました。黙々と練習をしてきた結果で、誰でもきっかけがあればスポーツを楽しめるということが実感できました。

ボッチャ競技の松田選手と

また、今年の障スポ滋賀大会では、初めてフライングディスク競技に帯同しました。愛媛県から選ばれた4人の選手たちは、短い練習期間の中で、高知県の大会に一緒に遠征するなどしてチームワークを磨き、銀メダル2個（伊藤選手、木本選手）、銅メダル3個（伊藤選手、橋本選手、河村選手）を獲得することができました。競技が進む中、緊張をしてガチガチになっている場面でもみんなの声援が後押しして全員がメダルを取れたときには、涙でみんなの顔が輝いていました。

今回の帯同でもコミュニケーションと仲間の大切さを学ぶことができました。私たち指導員も、イベントや練習会の場面での声掛けや指導方法などまだまだ成長しなければと感じました。

フライングディスク競技の仲間たちと

近畿ブロック

ブロック活動報告

「わたSHIGA輝く障スポ2025」を終えて

この感動を、滋賀県のパラスポーツ界の未来へ

REPORTER 赤井弘和（滋賀県パラスポーツ指導者協議会会長）

10月25日～27日まで「わたSHIGA輝く障スポ2025（第24回全国障害者スポーツ大会）」が「湖国の感動 未来につなぐ」のスローガンのもと、全国から約6,000人の選手・役員を迎え、44年ぶりに滋賀県で開催されました。国スポにおける滋賀県の天皇杯（男女総合優勝）、皇后杯（女子総合優勝）獲得の快挙という追い風を受けて、地元滋賀県選手団は、個人競技146名、団体競技143名、合計289名の選手が参加し、滋賀県下各地で熱戦を繰り広げました。

開会式では、入場行進の最後に陸上、ボーリング、ボッチャ、フットソフトボール、バレーボール（聴覚）の選手・役員がそれぞれ思い思いに観客のみなさんにアピールしながら堂々と行進していました。競技では、あいにくの雨模様の中、選手たちは持てる力を十分に発揮し、全国から来た選手たちと交流を深めてくれたと思います。結果、地元滋賀県選手団は、金メダル87個、銀メダル53個、銅メダル34個、合計174個のメダルを獲得、14の大会新記録を樹立するという素晴らしい成績を残し、多くの感動を与えて大会は大成功のうちに終了しました。選手は、地元の大会に出場したことで、身近な人たちに自分たちの素晴らしいパフォーマンスを見せられたと思います。今回得られた素晴らしい感動と思い出を忘れずに、これからもいろいろなスポーツにチャレンジし、いつまでも輝いていてほしいと願っています。

大健闘を見せた滋賀県選手団

開会式の滋賀県選手団

閉会式では、大会旗が三日月大造 滋賀県知事から、来年開催の宮下宗一郎 青森県知事に引き継がれました。「青の煌（きら）めき あおもり国スポ・障スポ2026」大会の成功を祈るとともに、青森大会での滋賀県選手団の大活躍にも期待しています。また次に近畿で開催されるのは、6年後（2031年）第30回の奈良大会となります。

九州ブロック

ブロック活動報告

「universal BASKETBALL」

沖縄パラバスケの未来へつなぐ総合バスケイベント

REPORTER 瑞慶覧 猛（上級指導員／パラスポーツでちむどんどん実行委員長）

短い梅雨が明けた6月28日、沖縄市体育館にて県内初の試みとなる「見て・触れて・体験して、交流する」総合型パラバスケットボールイベント「universal BASKETBALL」を開催しました。

本イベントは、沖縄市スポーツ協会・パラスポーツ専門部とタイアップし、県内で活動するパラバスケ団体、車いすバスケットボールチーム「SEASIRS」、ツインバスケットボールチーム「フェニックス」、沖縄県FIDバスケットボール連盟・男女チーム、パラスポーツでちむどんどん実行委員会が主体となり、パラバスケットボールの普及と広く県民に周知の意を込めて行われました。

イベントは、午前中に車いすバスケの魅せる練習会と並行しミニバスケの交流試合を行い、午後から競技用車いすの試乗会、各団体によるバスケ体験会、FIDバスケと社会人チームとの交流試合、ミニバスケ選抜チームとSEASIRSによるスペシャルマッチ等、盛りたくさんの内容でした。

イベントに参加したみなさん

ツインバスケ体験

イベントに参加した小学生と車いすプレイヤーとの交流も随時見られ、「なんで車いすなの？」「足は動かないの？」など、普段聞きにくいような質問にも真摯に答えるプレイヤーの姿がありました。

沖縄県は2034年に国スポ・障スポの開催を予定しています。本年度県庁内にも準備室が立ち上がり、パラスポーツ競技団体、関係団体にも〝ちむどんどん〟が大きくなりはじめています（「ちむどんどん」とは沖縄の方言で「胸がわくわくする気持ち」という意味です）。

開催まであと9年…、まだ9年…。考え方は人それぞれだと思いますが、私たちパラスポーツ関係者は団体間の垣根を越えて、沖縄のパラスポーツを盛り上げたいと考えています。今回初開催ではありましたが、220名以上の方が会場にお越し下さりました。この参加者の中からひとりでも多くの方が2034年の大会に関わってくれることを願い、また今後もこの活動を継続していきたいと関係者一同強く思うイベントでした。

みんなでバスケを楽しんだ1日!